

5. きらめく動物たちの命と海 【久保田信の白浜だより(その31)】

ウミガメの未来

▲京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”での産卵

砂浜を歩いていると死亡したウミガメの漂着个体ばかりでなく、ほほえましい光景に出くわすこともある。2003年夏にもアカウミガメの卵をじかに見ることができた。これは、瀬戸臨海実験所へ勤務してから初対面の1992年の産卵時の遭遇に続く2度目の対面だった。知人が北浜で砂の表面に出ていた数個の卵を2003年8月下旬に発見し、発見し知らせて下さった。元瀬戸臨海実験所職員の田名瀬英朋さんとともにその現場に行ってみたところ、7月初旬に田名瀬さんがウミガメのはった跡を発見し記録済みの地点と一致した。通常2箇月でウミガメ類の卵はふ化するので、すぐに掘り出すのは止めて、完全に孵化し終わった時点を見計らって、いろいろ調べることにした。

9月中旬になって瀬戸臨海実験所に全国から多くの大学生がやって来た。実習のスケジュールには入ってなかったが、ウミガメの孵化直後の時期とちょうど重なったので、学生たちに孵化の確認を穴掘りをして見てもらった。驚いたことに、50cmの深さで予想よりも浅い所に卵があった。波浪などで地形が変わりやすい北浜の砂浜だから、幾つかの卵が表面まで放り出されたのも納得できる。卵は全部で100個余りあった。その6割ほどが孵化に成功していた。残りは黒ずんだ塊と化して、死んでいた。紀伊民報記者が学生たちにインタビ

ューした。ウミガメの卵について、「陸に上がって深く穴を掘って産卵するので、硬い殻と思っていた。こんなに軟らかいとは思わなかった」などと驚いていた。

3度目の遭遇も臨海実習中の発見で、同じ北浜で数個の卵が出ているのを学生が発見した(図)。そっと上の部分を砂をちょっとだけどけて調べてみると、17個はどうやら死んでいた。折からの台風15号の高波で砂浜の潮位のもっとも高い部分に産卵されてあったのが掘り出されて海水につかったからだ。でもまだ新鮮であった。数十cmほどのかぶさっていた砂がなくなっていたのでしかたないだろう(図)。下にまだある卵は生きているかもしれないので、その上に砂をかぶせておいて様子を見ることにした。

▲ウミガメの未来は暗い

自然界は厳しく、ウミガメを取り巻く環境はどんどん悪くなる一方だ。このような状況の中で、生まれ故郷のここ北浜に戻って産卵できるのは、ほとんど奇跡に近いだろう。瀬戸臨海実験所に勤務する地元出身の職員や古くから白浜町で暮らしている方々は、「昔は、このあたりでウミガメ類の産卵がよく見られたものだ」という。白浜町ではウミガメ類の産卵は、昔話になりつつあるようで残念だ。

一方、ごく最近、ウミガメ特有の奇病「フィブロパピロマ」の慢延が懸念されているという報道もあった。ますます気がかりだ。南部町の千里の浜では、最も多い時に上陸900回(1990年)、産卵348回(1991年)の記録もあり、『ウミガメ銀座』状態だったが、その後は減少の一途をたどり、2003年だと上陸155回、産卵75回となった。産卵に適した砂浜の減少に加え、近年、漁網や漁獲法などがすこぶる発達したことから、混獲によって相当数のウミガメが犠牲になっていることが想像できる。希少動物であるウミガメを、子々孫々まで残すのは、我々の義務だ。

ところで、米国のデューク大学の研究グループは、このほど、世界中で年間30万個体のウミガメ類が、誤って漁網にかかったり、マグロはえ縄にかかったりして混獲されているとの試算を出した。同グループは、アカウミガメやオサガメが、過去20年間で80~90%も減少したことを指摘している。混獲後の死亡率は不明確だが、アカウミガメは、太平洋だけでも年間数万個体が死んでいると見積られている。ウミガメ類の未来は暗すぎる。



図 白浜町京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”でウミガメの卵に遭遇(2012年8月28日)